

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

小松原織香

【所属】(助成決定時)

大阪府立大学人間社会学研究科(客員研究員)

【研究題目】

災厄の〈その後〉に焦点を当てた哲学の研究

【研究の目的】(400字程度)

申請者は、災厄が起きた〈その後〉の社会の復興を検討していく際に、「当事者の思想」がいかなる役割を持ち得るのかを明らかにする哲学研究が必要であると考え。本研究では「水俣病」問題を具体例として取り上げ、〈その後〉の「当事者の思想」の持つ社会的意義を検討する。水俣の「当事者の思想」では、患者は行政や水俣市民が「魂の痛み」に向き合うことを求めている。その思想の表現は特定宗教には依らず、「祈り」というスピリチュアルな形式をとっている。水俣市は行政としての宗教的中立性を保ちながら、「当事者の思想」を限界まで取り入れようとする、「火のまつり」や「魂石の設置」といった独自の施策を行っている。そのため、水俣の事例を検討することは、災厄の〈その後〉の哲学が、社会にもたらす影響を明らかにすることができる、学術的な意義があると考えられる。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は、水俣病問題の「当事者の思想」に関連する多様な領域を取り上げ文献資料や芸術表現資料を網羅的に収集し、水俣の関係者を訪問して情報収集を行うことで、「当事者の思想」を浮かび上がらせた。すでに申請者は2015年9月より水俣に関する調査を開始し、現地での支援団体や行政関係者とのネットワークも樹立しているため、それを十分に活用した。

研究方法は、(1)水俣での現地調査(2)東京の国会図書館での資料調査(3)より発展的な他地域の調査の三つのアプローチで行った。

(1)水俣での現地調査

2016年10月、2017年3月、7月の3度にわたり、水俣での現地調査を行った。3月の訪問時には、入念な資料調査を行うとともに、1970年代から水俣病患者支援に取り組む関係者から当時の状況を聞き取ることができた。また、7月の訪問時には水俣病患者支援団体「相思社」の職員と議論を行い、緊密な関係を築いた上で、今後も研究に対する協力関係を継続することを確認した。

(2)東京の国会図書館での資料調査

水俣病関連資料を調査するうちに、水俣の「当事者の思想」は1990年代に急浮上したものではなく、1970年代の資料にも記録されていることがわかった。そのため、1970年代から1980年代にかけて水俣を訪問した不知火海学術調査団の資料を中心に情報収集を行った。

(3)より発展的な他地域の調査

水俣での現地調査中に、五島列島の「かくれキリシタン」の研究との接点が明らかになり、調査を行うことにした。現在、長崎県は世界遺産登録を目指して、「かくれキリシタン」の教会群遺跡について、行政として観光地化を進めている。これは「宗教的中立性を保ちながら当事者の思想を取り入れる」という事業の一環と考えられるため、現地を訪問し、「かくれキリシタン」の当事者から情報収集を行った。

【結論・考察】（４００字程度）

本研究で明らかになったのは以下の２点である。

(1)水俣の「当事者の思想」の系譜

本調査を経て、水俣の「当事者の思想」はすでに不知火海総合学術調査団の宗像巖によって、調査研究が行われ、理論化されていることが明らかになった。宗像は宗教社会学者であり、水俣病患者を継続して訪問し、聞き取り調査を行いながら、不知火海を中心とした漁民の精神世界の構造を読み解いた。この宗像の研究は西洋哲学の枠組みを借りながら、独自の水俣の「当事者の思想」を分析したものである。宗像研究を精査し、1990年代に浮かび上がった「当事者の思想」との整合性を検討した。その成果は2017年11月に開催される社会思想史学会で口頭報告する予定である。

(2)行政の施策と「当事者の思想」の接合可能性

五島列島を訪問し、「かくれキリシタン」について調査を行ううちに、世界遺産登録は建物に限られるため、「当事者の思想」は現段階では行政の施策の中に取り入れられている部分は極小であるとわかった。「かくれキリシタン」と長崎県の施策と、水俣病患者と水俣市・熊本県の事例を比較検討することで、行政の施策と「当事者の思想」の接合可能性がより鮮明になると考えられる。これは、今後の課題となる。